

「世界のきびしい悪意」の真相：中島敦の「古俗」

畢, 復芸
九州大学大学院比較社会文化研究科

<https://doi.org/10.15017/15971>

出版情報 : Comparatio. 2, pp.127-146, 1998-04-10. Society of Comparative Cultural Studies,
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

「世界のきびしい悪意」の真相―中島敦の「古俗」

畢 復芸

中島敦の「古俗」は「盈虚」「牛人」の二篇から成っている。その「牛人」の中に出た「世界のきびしい悪意」という文句は、ほかの作品を論じる時も、常に中島文学を貫く主題として研究者たちに引用されている。確かに、それは中島の文学において見逃すことのできない重要な手掛りである。しかし、中島文学は「悪意」の世界だけなのだろうか。このことは「古俗」からももう一度見直す余地があると思われる。この「世界のきびしい悪意」が意味するところを究明するのが本稿の目的である。

一、 非現実世界への幻滅―「盈虚」

「盈虚」は『春秋左氏伝』の定公十四年、哀公二年、同十五年、同十六年、同十七年の衛の**蒯聵**（莊公）に係する記事を素材として書かれた小説である。筋がほぼ史実をそのまま追い、それにわずかの創作によつて再構成されている。

主人公・衛の太子**蒯聵**は宋の野で農夫が唄を歌うのを聞いて恥じて、父靈公の南子夫人を刺殺することをはかるが、失敗し、晋に逃げた。靈公の死後、**蒯聵**の息子輒が即位したことを聞き、帰国をはかるが、阻止されて十

三年間戚のところに留まることになった。その間、**荆驥**はひねくれた中年の苦勞人となってしまつて、赴いてきた息子疾への溺愛と鬪鶏への耽溺が唯一の慰めである。輒をたすける孔叔圉が死んだ後、姉伯姫と渾良夫（姉情夫）と共謀をして孔**愷**を脅かしてクーデターを行った。即位した**荆驥**（莊公）は空費された過去に対する補償、復讐や快樂の追求に熱中した。（重臣への処罰、孔**愷**の追放などの事件。）渾良夫との密談を知つた疾が莊公を脅かし、四度目の罪がある場合、渾良夫を殺すことを承諾させる。そして、ある宴会で疾は四つの罪を取り上げて良夫を殺害した。

晋の要請に対して、莊公は国内紛争という言い訳で使いを以て猶予を申し入れたが、疾も父を陥れるために使者に、単なるいいのがれであるとの密告をさせた。その年の秋のある夜、渾良夫が出た悪夢を見た莊公は不吉な予言を知つた後、再び鬪鶏に耽溺してしまつた。

ある日、眼障りとの理由で戒人を追放させ、また、寵姫の鬢を拵えるため、戒人己氏の妻の美しい髪を切取らせた。冬、晋軍の侵入と呼応する大夫・石圃の反乱（一説には疾との共謀による）に遭つて逃げだした莊公は戒人己氏の家に辿り着いたが、無惨に殺された。

「盈虚」の粗筋は大体以上である。木村瑞夫によれば、「盈虚」は最初「或る古代人の半生」と題して「政界往来」に掲載されていたが、のちに中島敦の二冊目の単行本『南島譚』を出版する際、「盈虚」と改名され再発表された（注1）。中島敦にとって「盈虚」という題目はそうでなくてはならないものであり、それは原題以上にその内容や主題に符合している（注2）。この題目については少し説明しておかなければならない。「盈」と「虚」とは文字自体の表面から見れば、「栄えることと衰えること」或いは「満ちることと欠けること」という意味である。木村瑞夫は、即位した莊公が空費された過去に対する補償や快樂の追求ということに注目して、「盈

虚」を「空虚なものを取り戻す」と読むべきだと主張する（注3）。

しかし、そのように読むならば、最後に悲惨な運命に辿り着いた莊公の姿はどう解釈すればいいのか。これでは偏りすぎて作品全体を包容できなくなり、主題を見失うおそれがある。**蒯瞶**が十六年間の逃亡生活を経てやっと衛に帰って即位して莊公になったことは不遇時代の「虚」（衰えること）から復興の「盈」（栄えること）に至る過程であるが、復讐や快樂の耽溺、太子疾の冷酷刻薄や反乱によって滅びるに至ることは再び「虚」（衰えること）の方向に傾いていく過程であると言ってもいい。しかし、小説「盈虚」についての題目を考慮していると見られる中島敦の残したノートのメモには、「栄辱録」という題名も見られ、これは「ほまれとはずかしめ」ということであり、「栄えることと衰えること」と意味が似てはいる。しかし、中島敦が「栄辱録」を放棄して「盈虚」を選んだのは別の意味を含む意図があると考えられはしないだろうか。いうまでもなく、**蒯瞶**の一生の起伏は彼自身にとって「栄えること」と「衰えること」そのものであるが、運命という大きな命題の下に置くならば、それはただ個人の「盈虚」との問題ではなく、もつと人間を超越するものとの関係を象徴する。即ち、人間が自分で把握できる運命と超越者に操られる運命との関係である。そうすると、「盈虚」とは「栄えることと衰えること」というより、「満ちることと欠けること」である。

村田秀明は「盈虚」の出典が『孔子家語』巻四「六本第十五」の第八話の孔子説話からであると言う。（注4）

孔子が「易経」を読み、損卦、益卦の箇所を嘆いて溜息をついた。弟子の子夏からその理由を尋ねられ、孔子は「それ自ら損する者は必ずこれを益するあり、自ら益する者は必ずこれを決くあり。吾れここを以て歎ぜるなり」と答えた。さらに孔子は「それ學ぶ者はその自ら多とするところを損して、虚を以て人を

受く。故に能くその満を成す。博きかな、天道。成れば而ち必ず變ず。凡そ満を持して能く久しき者は未だ嘗て有らざるなり。故に曰く「自ら賢とする者は天下の善言をば耳に聞くを得ず」と、慎み深かった聖天子堯と、驕り高ぶった夏の桀王、そして桀王と乱をなした昆吾との千年後の評価の違いをあげて、「その盈虚を調べて、自らをして満せしめざるは、能く久しくする所以なり」と学ぶ者の心得を述べた。

（『孔子家語』藤原正校注、岩波文庫 昭八・十）

孔子が「易経」を読んで嘆いたのは、自分自身に執着して自然損益の外側世界を無視し、自ら悲劇に導いた人たちの無知だと言える。人間の運命における盈と虚は実は自然現象における盈と虚の一環としてとらえられる。人間の運命を考える時、自然の変化や時代の推移を考慮に入れる、つまり人間を越えるもつと大きな運命の下に考えなければならぬということである。中島敦の小説「盈虚」は単なる**蒯聵**の不幸な半生を描くために書かれたのではなく、「運命とは何か？」という大きな命題の下に人間の存在を探究するために書かれたのである。故に、より中島敦の意図に近いところの「満ちることと欠けること」という題目「盈虚」が選ばれたのである。

さて、**蒯聵**が惨めな最期になったのは彼の性格が至らしめるのであるとよく言われている。最初、**蒯聵**は南子殺害を図るが、不本意に刺客の裏切りによって失敗して国を出奔することになった。何年の月日を送った後、父衛侯の死に伴って、**蒯聵**の子輒が即位したことを聞いた**蒯聵**は「直ぐにも故国に帰って自分が衛侯となるのに、何の造作も無い」と思つて帰国したが、意外にも拒まれて戚のところまで十三年間送らざるをえないことになった。これは**蒯聵**にとつて自らの意志を押し通しながら思いがけない最初の二つの挫折であったと同時に、次のような性格、心理や態度へと変えていく原因ともなった。

明け暮れ黄河の水ばかり見て過ごした十年余りの中に、気まぐれで我が儘だった白面の貴公子が、何時か、刻薄で、ひねくれた中年の苦勞人に成り上っていた。

知らず知らず形成されたこのひねくれた性格が**崩壊**を憎悪と食欲との暗い世界に閉じ込めて、息子疾への溺愛と鬪鶏への耽溺に慰めを求めすることに導かせた。この性格や生活態度の設定は原典に見られない中島の創作である。中島はこれらに注目し、かなり筆を費やしたのである。

姉の伯姫や渾良夫と共にクーデターを断行して即位した**崩壊**が先ず行おうとしたのは「外交の調整でも内治でもない。」それは「空費された己の過去に対する補償」で、或いは「過去への復讐」であった。

不遇時代に得られなかった快樂は、今や性急に且つ十二分に充たされねばならぬ。不遇時代に惨めに屈していた自尊心は、今や俄に傲然と膨れ返らねばならぬ。不遇時代に己を虐げた者には極刑を、己を蔑んだ者には相当な懲しめを、己に同情を示さなかった者には冷遇を与えねばならぬ。(中略)：衛侯となつてからの最初の一年は、誠に憑かれた様な復讐の月日であった。空しく流離の中に失われた青春の埋合せの為に、都下の美女を漁っては後宮に納れたことは附加えるまでもない。

長年にわたつてもたらされた**崩壊**の歪んだ性格は即位後、あらわにして具体的な行動に出てしまった。濱川勝彦はこれを**崩壊**の「自分をかくまで翻弄し、虐げた『運命』への挑戦である。」(注5)と言うが、一連の復讐行動から見れば、**崩壊**はただ失われたもの、流れ去ったものを取り戻すために「今」という時点の現実から目を

逸らし、過去に執着していたにすぎないのである。衛侯となった後、意図としたのは政治の整頓ではなく、補償、復讐、享楽だけであった。**蒯瞶**はもはや運命に立ち向かって戦う能力を喪失してしまっていた。あくまで現実逃避の行動に過ぎなかったのである。「運命への挑戦」どころか、運命に任意的に流されるほかなかった。**蒯瞶**の「現実逃避」という弱点はさらに息子疾への溺愛と鬪鶏への耽溺に現された。まず、太子疾の性格の形成を見てみよう。

幼時から不遇の地位にあつて人の心の裏ばかりを覗いて来たせい、年に似合わぬ無気味な刻薄さをチラリと見せることがある。幼時の溺愛の結果が、子の不遜と父の譲歩という形で、今に到る迄残り、はたの者には到底不可解な気の弱さを、父は此の子の前だけにだけ示すのである。

疾の無気味で刻薄な性格は完全に**蒯瞶**の溺愛から生まれた。起因は**蒯瞶**にあるけれども、**蒯瞶**はかえって持て余すほど冷酷非情な疾に迫られていた。輒が出奔に際し持ち去った累代の国の宝器を取り戻すため、**蒯瞶**は渾良夫と密談した。だが、その輒を呼び戻すという良夫の提案は密偵によって太子疾の耳に入ってしまった。翌朝、壯士を従えた疾は太子としての位置を保証することと、四度目の罪がある場合に渾良夫を殺すことを以て**蒯瞶**を脅かしたが、これに対して彼はただ「唯々として『諾』と答えるほかは無い。」そして、**蒯瞶**の腹臣渾良夫は疾によって殺された。また、「一日も早く父に代り度いが為」晋の訪問要請に対して猶予を申し入れる**蒯瞶**を陥つて、父衛侯の返辞は単なるいいのがれで、欺されぬように、と晋に密告した。ここまで見てきて、**蒯瞶**と疾との父子相克関係がはっきり見られる。しかも、最後の反乱について中島はさらに史実でない「一説には

又、太子疾の共謀によるのだともいう」と書いた。**剽積**は息子疾によって殺されたといつてもいいであろう。

疾の性格の形成は中島の特に着目した創作部分である。これは勿論歴史背景に沿って発展させたが、歴史事件以外の人物描写は明らかに中島の企図が潜んでいる。過保護に育て上げられた疾の性格は**剽積**の放縦と卑怯が深刻になるにつれて益々あらわになってきた。これは一体何を意味するか。**剽積**と疾との「親子関係」に注目したい。彼らの間は血の繋がりで結び付けられた、一種の倫理関係である。即ち、疾は**剽積**から出てきた存在であり、**剽積**の分身でもある。疾は「悪」の集約であり、**剽積**の内に存在している「悪」の具体像である。現実逃避の**剽積**は自身の「悪」に直面できないから、ただ怯えて、暫くの耽溺によって自分を麻痺させようとした。故に、最後のなりゆきでは「太子疾の反乱」は必然的な設定だと考えられる。父親殺しというより、**剽積**は自分自身に起因した「悪」によって滅ぼされてしまうのである。これは中島敦が「盈虚」を創作した企図の一つであるといつていい。

もう一つ**剽積**の「現実逃避」という心理表現は鬪鷄への耽溺にある。これは原典にない事実であるが、中島敦は素材を他に仰いで、当時古代中国で貴族の間に流行っている鬪鷄遊戯を**剽積**の生活態度に当てはめたと指摘されている（注6）。「鬪鷄への耽溺」という場面は前後二箇所ある。最初の不遇時代に、

息子の外にもう一つ、彼は一種の捨鉢な情熱の吐け口を鬪鷄戯に見出している。射倖心や嗜虐性の満足を求める以外に、逞しい雄鷄の姿への美的な耽溺でもある。

次に、渾良夫が殺された後のある夜、その渾良夫が出てくる妙な夢を見た莊公は占いの卦によって残年の短さを

覚悟させられるが、「暗い予言の実現する前に少しでも多くの快樂を貪ろうと只管にあせるばかりである。」

一時忘れられていた鬪鶏戯への耽溺も再び始まった。雌伏時代とは違つて、今度こそ思い切り派手に此の娛しみに耽ることが出来る。金と権勢とにかして国内外から雄鶏の優れたものが悉く集められた。殊に、魯の一貴人から購め得た一羽の如き、羽毛は金の如く距は鉄の如く、高冠昂尾、誠に稀に見る逸物である。後宮に立入らぬ日はあつても、衛侯が此の鶏の毛を立て翼を奮う状を見ない日は無かつた。

逆境に立ち向かうことができない**刺瞎**の姿は生き生きと浮き彫りされている。これと呼応して最後の逃亡と死亡の場面に**刺瞎**の執着心が一層際立つて描かれている。戎人己氏の妻の見事な髪を根本から切り取らせ、自分の寵姫の髻を作らせた事件を前提として、石圃の乱を逃れて戎人己氏の庭に入った莊公はついに殺される。

(前略) 諸公子・侍臣等の少数を従え、例の高冠昂尾の愛鶏を自ら抱いて公は後門を踰える。(中略) 気が付いて見ると、公はまだ鶏をしっかりと抱いている。先程から鳴声一つ立てないのは、疾うに死んで了つていたからである。それでも捨て去る気になれず、死んだ鶏を片手に、匍つて行く。(中略) ……男は、部屋の際に蹲っていた一人の女を招いた。其の女の顔を薄暗い灯の下で見た時、公は思わず鶏の死骸を取り落とし、殆ど倒れようとした。被衣を以て頭を隠した其の女こそは、紛れもなく、公の寵姫の髻のために髪を奪われた己氏の妻であつた。

危機のさなかでも「鶏」も放さない**蒯瞶**は惨めで狂気に近い。自ら死へ一歩一歩確実に近づいて行く姿は読者に不気味に思わせる。「鶏」こそがその役割を果たすのである。**蒯瞶**は自分で自分を滅亡の道へ導くに違いない。「鶏」について、張娜麗は次のように述べる（注7）。

中島の象徴的な設定事項と見られる鶏は、**蒯瞶**の一面の生の動向そのものを表象するかのようで、逃走の混乱の中で死んだ鶏は、死んだことを知らずに抱きつつ逃げ、生きようと足掻き竟いには己が運命の袋小路に入り、自らの業により殺され果てる**蒯瞶**の生死そのものを示すかにも見える。

一国の君主である**蒯瞶**は「高冠昂尾」の鶏の如く、死骸になって地面に落ちた時、**蒯瞶**の命も終わりに入った。鶏を**蒯瞶**の生死の表象と見なすならば、それは題目「盈虚」によく符合し、**蒯瞶**の波瀾万丈の一生を象徴できると思われる。しかし、中島が特に筆を費やして描いた「闘鶏への耽溺」という場面はこの象徴ではなく、現実逃避の別世界で、即ち現実に対する非現実という象徴でもある。身が置かれる状況が悪化するほど、**蒯瞶**はもっと快楽を貪り、闘鶏に耽溺してしまう。現実には直面できない**蒯瞶**にとって、非現実への逃避は唯一の生きる道である。鶏が死骸になって地面に落ちた時、**蒯瞶**の非現実世界も幻滅し、死なざるをえないことを意味している。**蒯瞶**の死は彼の始めて現実に対面した時である。あまり悲惨かつ滑稽な運命であるが、一切の原因は彼の「現実逃避」という心理・態度に帰すべきなのである。彼は既成現実に対して認識・反省する勇氣に欠けているし、放縦や享樂によって安定をはかるだけで、再三にわたって運命とすれ違い、個人の上に存在する超越者にさえも気付かなかった。

剽竊はゆがんだ性格によって自分を惨めな運命に導いた。あらゆる歴史事件は因果関係で運命の必然や偶然をおしはかることができるであろう。歴史では結果から見れば自ずから「運命」という命題と結び付ける。「盈虚」において「運命」というモチーフを見出すのは勿論のことであるが、中島はただ運命に翻弄される人間像を描くために「盈虚」を創作したわけではない。「古俗」の世界は人間を逃れられない時間と空間の下に置いて、人間と運命との関係を探究する。「盈虚」には作者中島の企図が二つある。自己の存在悪（息子を象徴とする自分自身「悪」）によって滅ぼされることと、現実と協調することを知らずに運命に翻弄されることである。「盈虚」では運命が最終に「悪意」に転じたのは、人間を弄ぶかのように見えるが、実は人間自身にある「悪」に直面できないことから生じたのであり、また、外側に存在する力と協調することを回避するからである。主人公**剽竊**はわけも分からず悲運に踏み入れたのではなく、予言の夢さえ無視して自ら救いの道を放棄したわけである。中島は「盈虚」で人間の上に存在する超越者をほのめかしている。この超越者の下では弱い人間は一刻も油断できない。つまり、中島は「盈虚」に於いて人間を憐憫する一方で、きびしい姿勢を以て人間をみつめるのである。

二、自意識への執着―「牛人」

「牛人」も素材を『春秋左氏伝』に仰いで創作された小説である。魯の大夫・叔孫豹の一生を描いている物語であるが、「盈虚」と違って、ほかに叔孫豹と係わっている記事が削られ、主に豎牛にまつわる昭公四年の記事に集約して、また大幅に加筆して書かれたのである。まず、あらすじを見てみよう。叔孫豹が若かった頃、乱を避けて一時斉に逃げたことがある。途中に一美婦と出会って一夜を共にしてから翌朝斉に入った。斉で大夫国氏

の娘を娶って二人の息子を挙げた。ある夜、天井が下降してきて押しつぶされそうになった時、真黒な牛によく似た男が手をさしのべて支えてくれるという夢を見た。数年後、先に帰国した。落ち着いて大夫として魯の朝に立つに及んで妻子を呼ぼうとしたが、妻はすでに他人と通じていた。結局、二人の息子だけが父のところへ来た。ある朝、昔、契った美婦がその時にできた息子を連れてきた。その息子（後、豎牛と呼ばれる）は叔孫豹がずっと探していた夢の中の恩人とそっくりだったので、叔孫豹にひどく可愛がられ、成長してからは家政一切を切り回すようになった。魯の襄公が死んで若い昭公の代となる頃から、叔孫豹の健康が衰えはじめた。病中の身の廻りの世話から、病床よりの命令の伝達に至るまで、一切が豎牛一人に任せられることになった。だが、この頃から豎牛はだんだん下心を表して、叔孫豹の長子孟丙を殺し、次子仲任を斉に出奔させた。叔孫豹も食事を与えられなくなり、そして前と同様な夢を見た。しかし、今度はその牛男は黙って立ったままにやりと笑うだけであった。三日の後、叔孫豹は飢えて死んだ。

「牛人」の構成は簡単明瞭で、叔孫豹の前後二つの夢の間に物語の筋を埋めるといふ形である。この二つの夢は、重要な役割を果たしている。「牛人」を論じる際、見逃してはならない。なぜなら叔孫豹の運命は夢から始まり、また夢に終わるからである。最初の夢では、原典の「夢に天、己を壓して勝へず。顧みて人を見れば、黒くして上僂、深目にして**殺**喙、之れを號びて、『牛、余を助けよ』と曰へば、乃ち之に勝つとみる。」（注8）という簡単な叙述を、中島敦はかなり周辺の雰囲気を広げて加筆した。

或夜、夢を見た。四辺の空気が重苦しく立罫め不吉な予感が静かな部屋の中を領している。突然、音も無く室の天井が下降し始める。極めて徐々に、しかし極めて確実に、それは少しずつ降りて来る。一刻毎に

部屋の空気が濃く淀み、呼吸が困難になってくる。逃げようともがくのだが、身体は寢床の上に仰向いた儘どうしても動けない。見える筈はないのに、天井の上を真黒な天が磐石の重さで押しつけているのが、はつきり判る。愈々天井が近づき、堪え難い重みが胸を圧した時、ふと横を見ると、一人の男が立っている。恐ろしく色の黒い僵儻で、眼が深く凹み、獣の様に突出た口をしている。全体が、真黒な牛に良く似た感じである。牛！ 余を助けよ、と思わず救を求めると其の黒い男が手を差し伸べて、上からのし掛かる無限の重みを支えて呉れる。それからもう一方の手で胸の上を軽く撫でて呉れると、急に今迄の圧迫感が失って了った。ああ、良かった、と思わず口に出した時、目が醒めた。

のしかかってくる天井は胸を圧して呼吸を困難にさせるものであり、それは生存に危機を与える象徴といつてよい。命に係わる危機に襲われるものが思わず誰かに助けを求めることは人間の本能であろう。「牛人」の叔孫豹は横に立っている男が「恐ろしく色の黒い僵儻で、眼が深く凹み、獣の様」であるにもかかわらず、助けを求めた。手を差し伸べて無限の重みを支えてくれる「恐ろしく」て「獣の様」な人は正に救済者であると叔孫豹は思い込む。そしてこの夢をきっかけとして叔孫豹は「救済者」を捜し求めはじめる。次に牛男と会って、進んで無限の信頼を与えるのもこの夢に因むのである。この夢は叔孫豹にとって明らかに一種の予言であった。

物語の結末部に第一の夢と似ている夢が現れたが、今度黒い牛男が手を伸べてくれず、「見下す」だけである。

寝ている真上に天井が、何時かの夢の時と同じ様に、徐々に下降を始める。ゆっくりと、併し確実に、上からの圧迫は加わる。逃れようにも足一つ動かせない。傍を見ると黒い牛男が立っている。救を求めても、

今度手を伸べて呉れない。黙ってつツ立った儘にやりと笑う。絶望的な哀願をもう一度繰返すと、急に、慍ったような固い表情に変わり、眉一つ動かさずに凝平と見下す。今や胸の真上に蔽いかぶさって来る真黒な重みに、最後の悲鳴を挙げた途端に、正気に返った。

第二の夢は原典に見られない中島の独創である。同じ天井から加わる恐ろしい圧迫という夢の設定であるが、「救済者」であつた牛男は一変して「加害者」になる。前の夢と呼応するこの夢は謎を解く役割を果たし、予言の真の意義が明らかにされる。だが、やっと牛男の真相を分かるようになった叔孫豹は、死に臨んでいてもはやり取り返しがつかない。夢から覚めた叔孫豹は恐怖に陥った。

：（中略）傍を見上げると、これは夢の中とそっくりな豎牛の顔が、人間離れのした冷酷さを湛えて、静かに見下している。其の貌は最早人間ではなく、真黒な原始の混沌に根を生やした一個の物のように思われる。叔孫は骨の髄まで凍る思いがした。己を殺そうとする一人の男に対する恐怖ではない。寧ろ、世界のきびしい悪意といった様なものへの、遜った懼れに近い。最早先刻迄の怒は運命的な畏怖感に圧倒されて了った。今は此の男に刃向おうとする気力も失せたのである。／＼三日の後、魯の名大夫、叔孫豹は飢えて死んだ。

極度の恐れの中での「世界のきびしい悪意」という嘆きのは、叔孫豹が自分にはいったい何の誤りがあるのか、なぜそんな目に遭わねばならないのか、という悟ることのできない嘆きである。一人の人間である牛男はここに

解体されて、叔孫豹にとって抽象的な運命に変わって、しかも「悪意」の運命そのものである。なぜ叔孫豹はそのような死に方で死なねばならないのか。秋元誠は次のように述べている（注9）。

人間離れた、黒い牛男はそもそもの初めから「悪意」の化身だったであり、第一の夢で救済者の如く現れたのは、実は叔孫にしばらくの猶予期間を与えたというほどの意味だった。あるいは現実の叔孫の前にいずれ黒い牛男が現れるという予言であった。叔孫としては、黒い牛男を「己の運命のすべてを掌中にしている恐るべき存在」として夢を解釈すべきだったのである。

叔孫豹の誤りは第一の夢を受け取り間違ったことにあると言っても過言ではない。しかし、「盈虚」に現れた夢は明らかに**崩積**の暗い結末を予言してくれるが、「牛人」に現れた夢はかえって救済者の出現を予告したかの如く、叔孫豹に誤った判断をさせる。かといつても、豎牛を救済者と思ひ込んで頼りにする決定は叔孫豹自身によるのである。叔孫豹は自分の運命への選択を初めから誤ったに違いない。これは叔孫豹の自分自身に対する自信に由来するからである。つまり、叔孫豹の誤りは自分を自分の運命の主宰者だと信じ込んだからである。故に、「牛人」の夢は単なる予言（しかも叔孫豹を誤解させる予言）だけではなく、人間の過大な自信に対する警告の役割でもある。

次は叔孫豹と豎牛との親子関係を見てみよう。豎牛が叔孫豹を餓死させるという話は、その出典は『韓非子』（内儲説上・七術第三十）と『春秋左氏伝』（昭公四年）とともに見られる。『韓非子』の方は豎牛がただの家臣という主従関係であるが、『春秋左氏伝』の方は親子関係として記載される。中島敦が親しんでいた『韓非子』

を排して、『春秋左氏伝』に準じて親子関係を採用するのは「父親殺し」という点に中島なりの意図があると考
えられる。ただし、これはギリシャ神話のエディプス・コンプレックスと違って、子側からの叙述ではなく、親
側から物語を発展するほかに、母親に近づくという気配も見えない（注10）。

「盈虚」では、**荆璠**と疾との親子関係は緊密なつながりがある。息子の不遜と父の譲歩は消長を呈しているこ
れに対して、「牛人」では豎牛は息子として深く信用されるというより、夢によって救済者として信用されるの
である。豎牛の性格についての描写も伏線を帯びた述べ方になっている。豎牛は「何時も陰鬱な顔をして少年仲
間の戯れにも加わらぬ。主人以外の者には笑顔一つ見せない。」

眼の凹んだ・口の突出た・黒い顔は、極く偶に笑うとひどく滑稽な愛嬌に富んだものに見える。こんな馴
やかな顔付の男に悪企など出来そうもないという印象を与える。目上の者に見せるのは此の顔だ。仏頂面を
して考え込む時の顔は、一寸人間離れのした奇怪な残忍さを呈する。儕輩の誰彼が恐れるのは此の顔だ。
意識しないでも自然に此の二つの顔の使い分けが出来らしい。

叔孫の息子の孟丙・仲壬に対しては「常に懇懃を極めた態度をとっている。」叔孫が病気で寝ついてから、一切
を豎牛に任せることになった後、豎牛の孟丙・仲壬に対する態度は「愈々遜ってくる一方である。」こういうふ
うに、豎牛は性格を裏に潜ませていると同時に、何を考えているかをすべて表に出さない。原典では豎牛は早く
お家乗っ取りの野心を現しているが（注11）、「牛人」では何を企てようとするかが分からない。叔孫からの信
任を得るに及んだ後、叔孫が病床に寝ついて動けない時を利用して、豎牛は悪巧みを振るいはじめた。二人の息

子を離反させること、孟丙を陥れて殺すこと、仲壬を斉に出奔させること、さらに叔孫を餓死させることなどである。奸計を実現するにつれて、豎牛は「唇の端が、其の時嘲るように歪んだ」、「黙って冷笑するばかり」、「会体の知れぬ笑が微かに浮かぶ」、「にやりと笑う」といった無気味を感じさせる表情を現した。このように、中島は豎牛の性格について、直接に言葉で或いは心理の起伏を描くのではなく、表情や行動を通して描くのである。

これに対して、叔孫の性格についての描写はどうか。原典では叔孫は善を好み礼を尊び、常に「詩経」の一節を利用して応答したり、仁や義を根拠としてものごとを判断する。しかし、叔孫には家来を選ぶことが不得意であるという欠点がある。そのためにまともな死に方はしないだろうと予言されている。しかも、生まれた時に、将来飢え死にするとすでに占い師から告げられた（注12）。正義を守る叔孫の死に方は政治上の因果関係があり、定められた宿命もあるように原典には見える。「牛人」では叔孫の性格ははっきり表されていない。中島は原典にある叔孫の性格についての描写を特に書き換えることもなく、ほとんど削除してしまった。無性格の叔孫を「牛人」に表そうとする創作意図が見られると考えられる。即ち、叔孫のような存在は決して特別な人間ではなく、我々と同様に運命の下に生きざまを見せる一般の人間だということである。

普遍化された叔孫と謎めいた豎牛との関係はただ美婦との一夜の契りによって生まれたのである。しかも、叔孫は「すっかり忘れ果てて了った」。何という怪い過去のことであろうか。だが、叔孫が悲惨な運命に達する顛末はここから始まる。名大夫叔孫と一美婦との間に生まれた子供が、なぜ「獣の様に」醜いのか。秋元誠が指摘したように「それは、叔孫の血の中の最も悪しきものすべてが豎牛に受け継がれたということである。」（注13）氏は豎牛を「そもそも天の悪意の申し子」と見なして、まさしく「真黒な原始の混沌に根を生やした一個の物」であり、「世界のきびしい悪意」そのものだったから、「叔孫の存在そのものをすべて滅し去ろうとした」

のであると言う。しかし、「盈虚」における**剝積**と疾との親子関係と同じように、豎牛も叔孫の分身であり、「叔孫の血の中の最も悪しきものすべて」である。「盈虚」では明らかに**剝積**は自らのひねくれた性格のため、疾の横暴もこの性格によって生まれたため、自分を悲運に導いた。「牛人」では叔孫の運は彼自身の性格によるのではなく、直接に叔孫から生まれた悪を代表する豎牛によるのである。この自分自身に起因する悪はつとに生み出され、常に我々が知らず知らずのうちに襲ってくる。要するに、叔孫は自己の悪によって死ななければならぬのである。とすれば、なぜ叔孫は死に瀕した時、「遜った懼れ」を持って「世界のきびしい悪意」を嘆いたのか。豎牛によって人間以上の存在を発見した叔孫は「運命的な畏怖感」を覚えながらも、自己の内なる悪に視線を向けようとはしない。これは叔孫が、いまだ自己への執着から解放されていないからである。

以上述べたように、豎牛は叔孫の存在悪を代表する役割を担当している。もう一つ注目したいのは、叔孫が恐れる対象である「世界のきびしい悪意」を代表する役割が豎牛にはあるということである。「盈虚」と同じように、「牛人」でも人間自身に内包する悪を描くと同時に、人間の上に存在するものをも提出した。即ち、人間に起因する悪は常に人間自身でも掌握できないほど拡大し、結局、人間を翻弄する運命とつながるようになる。「牛人」ではさらにこの二つ命題は豎牛という具体的な役に凝縮される。しかし、叔孫は人間の上に存在するものを気付いたけれども、自己の悪を認めずに死んでしまう。叔孫にとって我が息子は「真黒な原始の混沌に根を生やした一個の物」と化して、正に我が身の上に存するものの悪い意志であろう。これはあくまでも叔孫の認識の局限である。語り手の中島は叔孫を**剝積**よりももつときびしい状況に置いたが、叔孫の認識を越えて人間と運命の関係を見通す。

常に外界との協調を注意しなければならぬ人間にとって、このような存在はあまりにもきびしいであろう。

しかし、人間の最大の弱点は自分自身を信用しすぎる点である。運命の不条理は人間を翻弄して悪境地に陥ることを目的とするのではなく、むしろ自閉的な人間が行かざるをえない必然的な結果である。では、人間を越えるものとは一体何であろうか。決してそれは「きびしい悪意」に止まるわけではなからう。中島にとって「古俗」は正に「超越者」を求める作品であり、その解答は「古俗」ではまだ究明されてはいないが、中島の運命に対する認識が早くもここに見られると思われる。

【注】

(注1) 木村瑞夫、「『古譚』六篇説再考」、『日本近代文学』第三十九集、昭和六十三年十月

(注2) 南洋から帰った中島敦のノート(昭和十七年六月頃)には小説「盈虚」の題目を考慮するメモと考えられる幾つかの題名があった。次のとおりである。(『中島敦全集』筑摩書房、昭和五十一年三月／

第三卷三六五頁)

栄辱録

パラオ風俗抄

南海風俗抄

盈虚

逋竄記

村田秀明(「中島敦『盈虚』成立考」)によると、「逋竄記」の出典としては、『春秋左氏伝』「哀公

十六年」の**蒯瞶**関係の記事が考えられる。哀公十五年、クーデターにより即位した**蒯瞶**が周王へ使者を送り君位継承を報告させた内容に、晋国に亡命したことを指して「逋竄」と呼んでいる語が見える。（この記事は「盈虚」では素材としては採られていないが、前後の記事は採用されている。）「逋竄」とは「逃れ隠れる」ことである。ただ暗殺に失敗し晋に逃れた三年間、新衛侯に阻止されて戚に撤退した十三年間の亡命時代の**蒯瞶**の姿を指している。原題は最後に悲劇的な生涯を終えた**蒯瞶**の後半生を含めない題名であろう。結局、「盈虚」となった。

(注3) 木村瑞夫、「中島敦『古譚・古俗』論——統一性と分割性に関する考察——」「國語國文」第五十八卷第九号(六六一号)(京都大学文学部)、平成元年九月

(注4) 村田秀明、「中島敦『盈虚』成立考」、「国語国文学研究」第三十号(熊本大学文学部国語国文学会)平成六年一二月

中島敦蔵書には四部叢刊本『孔子家語』三冊十卷がある。村田秀明は四部叢刊本を底本とした岩波文庫『孔子家語』(藤原正校注 昭八・十)によって訓読文を引用した。ここではこれに準じて再び引用させていただいた。

(注5) 濱川勝彦、「『古譚』から『古俗』へ」、初出「文林」第九号、昭和五十年三月、単行本『中島敦の作品研究』明治書院、昭和五一年九月

(注6) 『莊子』や『列子』『史記』『戦国策』などに当時王が鬪鷄用の鷄を飼わしめたことが記されている。濱川勝彦(「『古譚』から『古俗』へ」)は『春秋左氏伝』に詳しく述べられている魯の季氏と郈氏との執念、怨念にみちた鬪鷄という例をあげて、当時の王や貴族の生活をみれば、「盈虚」に出ている

鬪鶏の場面があり得たことと言った。藤原恒男（『『盈虚』考』、『仁愛国文』第5号 昭和六十二年、一二月）は『春秋左氏伝』に見られない鬪鶏への耽溺という像の設定はこの物語のテーマと係わって重要な意味を持っていると述べる。

（注7）張娜麗、「中島敦の歴史小説——『盈虚』——」、「學苑」六六五号、平成七年五月

（注8）竹内照夫、全釈漢文大系第六卷『春秋左氏伝』下、九十二頁、昭和五十年十二月三十日

（注9）秋元誠、『『古俗』考——世界のきびしい悪意——』、『富山工業高等専門学校紀要』第二十九卷
平成九年三月

（注10）越智良二の指摘。（『『牛人』の基底』、『国語国文論集』第九号 昭和五十五年三月）

（注11）西谷博之の指摘。（『中島敦『盈虚』と『牛人』の世界』、『比較文学』第二十号、昭和五十二年）

（注12）西谷博之の指摘。同注11。

（注13）同注9。